

久留米入城400年記念  
京町校区の見どころ知りどころ  
第6回 日輪寺古墳

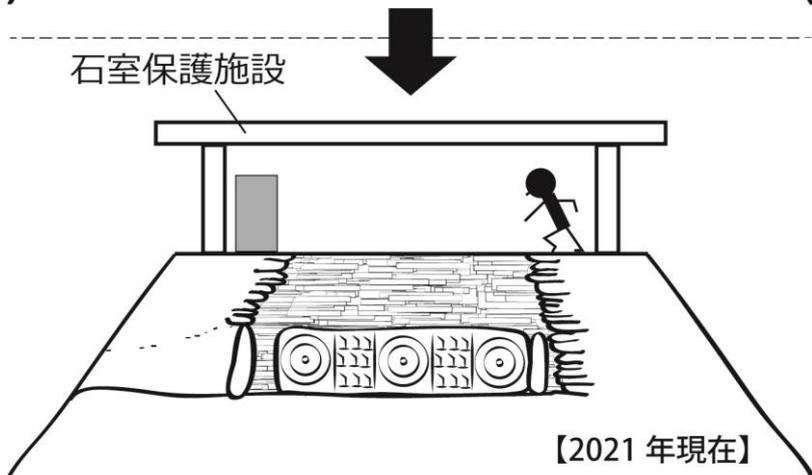
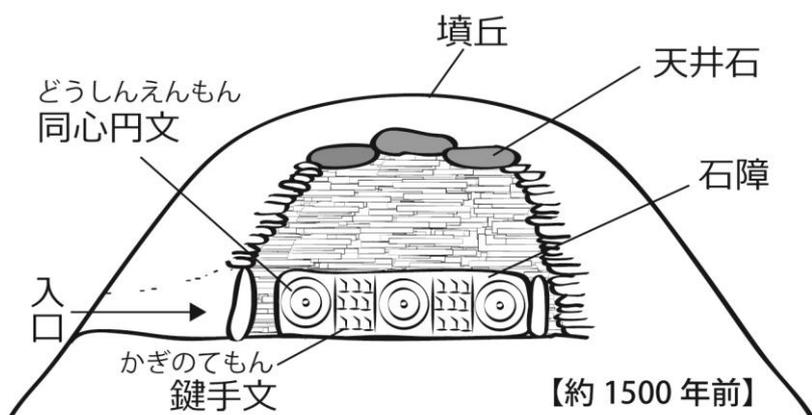
連載第6回では、装飾古墳である国の史跡「日輪寺古墳」について紹介します。

話し手の丸林さん（市文化財保護課）は、合併前の田主丸町に採用され、耳納北麓に多く分布する装飾古墳の発掘調査を行い、その後の整備や活用にも携わってきました。

Q. 古墳の名称のもとになっている日輪寺とは？

（丸林） 江戸時代の記録によると、久留米藩初代藩主・有馬豊氏（とうじ）の入国以前からあった古いお寺です。寺地は、豊氏の久留米城整備で二ノ丸予定地に当たったため、現在地に移転しました。2代藩主・忠頼（ただより）の代には、経隈山（きょうのくまやま）を寄進され、そこに観音堂が建立されました。いつしか経隈山は、安徳天皇の墓だという伝説も生まれました。

日輪寺古墳・断面イメージ



Q. どんな古墳だったのですか？

（丸林） もとは南北を軸とする前方後円墳で、全長約50メートルに及び、今から約1500年前、5世紀末から6世紀初頭に造られたものと考えられます。京町小学校辺りまで、古墳が広がっていたのです。

Q. 現在残っている部分は？

（丸林） ほぼ後円部にあたる墳丘です。墳丘上も、石室天井より低く削平されています。横穴式石室は、発掘調査が行われた明治45年にはすでに大部分が失われていました。



現在は、玄室（げんしつ）の一部が残り、内部の石障（せきしょう）に装飾が施されています。玄室は死者を安置した部屋、石障は玄室の壁に立てめぐらされた石材のことです。

Q. 日輪寺古墳の見どころ知りどころは？

（丸林） 暗い石室保護施設に入り、10分ほどして目が慣れてくると、石障に彫られた装飾が見えてきます。装飾古墳というと、耳納北麓で見られる、色を塗って描かれた壁画をイメージされるかもしれませんが、それよりも、日輪寺古墳のように彫って描く方が古い技法なのです。描かれた文様には魔よけの意味があり、被葬者が安らかに眠れるようお願いが込められています。

城下町建設以前、日輪寺古墳は筑後川を行き来する船が見えるような丘陵上にありました。被葬者は、筑後川交通にも関わっていた有力者だったと考えられます。

町なかに国指定史跡が所在するという意味でもとても貴重な古墳です（聞き手・市文化財保護課 穴井）